

生徒中心型指導がピアノ教師の教えがい¹に及ぼす影響²

今井 由起子^{2*}

本研究の目的は、地域におけるピアノ教育の指導上の困難や教授法が、ピアノ教師の教えがい¹にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることである。167名に質問紙を配布し、126名の有効回答が得られた。パス解析の結果、“生徒中心型指導”は、“ピアノ教師の教えがい”に直接正の影響を及ぼすと同時に、“生徒の学習意欲の低さ”を介して“ピアノ教師の教えがい”に影響を及ぼしていた。分散分析の結果、生徒中心型指導が行われている場合は、生徒の学習意欲が低くても、ピアノ教師の教えがいは低下しなかった。これらのことから、ピアノ教師が教えがいをもって指導に取り組むためには、生徒一人ひとりの能力や適性に応じた生徒中心型の指導が重要であることが示唆された。

キーワード：教えがい、ピアノ教育、生徒中心型指導

Mursell (1934 美田訳 1967) は、音楽教育は、教育の過程において、非常に大切な人間的なふれあいの理想的な機会を提供することが可能であるという理由から最もやりがいのある仕事であり、音楽の勉強は、先生と生徒という二者が共に、音楽の喜びの源を見出す芸術活動であり、楽しみながら何かを成し遂げ、人間的に成長することであると述べている。また、Cavaye・西山 (1987) は、音楽教育においては、演奏技術の習得を目的とするだけでなく、教師と生徒の人間関係を介して育まれる生徒の人格的成長が重視されるべきであると述べている。

このように、単に演奏技術の習得だけではなく、教師との人間的なふれあいから人間的成長を目指すという特徴を持つ音楽教育の中で、本研究では、我が国で広く行われているピアノ教育に焦点を当て、個人でピアノ教室を運営しているピアノ教師が指導上抱えている困難や生徒への指導法が、ピアノ教師自身の教えがいとどのように関連しているのかを検討する。

我が国において、現在では、ピアノ教師の数は、日

本論文に関するご意見・ご質問は、著者のメールアドレスまでお願いいたします。

(e-mail: imaiyukiko123@gmail.com)

* 明星大学人文学研究科

¹ 本論文は、日本音楽教育学会第 41 回大会で口頭発表したものを加筆修正したものである。

² 本研究は、2007 年度に横浜国立大学大学院音楽研究科に提出した修士論文の一部を再分析したものである。修士論文執筆に際し、ご指導頂きました小川昌文先生に深く御礼申し上げます。また本論文執筆に際し、ご指導いただきました明星大学人文学部心理学教授の岡林秀樹先生に心より厚く御礼申し上げます。さらに本調査にご協力頂いたピアノ教師の皆様へ感謝申し上げます。

本ピアノ指導者協会（略称ピティナ）で約 13000 人（全日本ピアノ指導者協会、2011）、日本ピアノ教育連盟で約 2500 人（全日本ピアノ教育連盟、2011；会員数は著者が 2011 年 11 月に電話で問い合わせ確認した）であり、非常に多くの人々がピアノ教育に携わっている。ピアノ教育が行われている音楽教室を運営しているのは、楽器メーカー、音楽大学、および個人のピアノ教師の 3 つに区分されるが、我が国で最も広く行われているのは、ピアノ教師が地域で運営している音楽教室である。

地域におけるピアノ教育の在り方は、ヨーロッパと我が国とで著しく異なっている。日本においては、義務教育の中に音楽教育が取り込まれてはいるが、その中でピアノ教育は行われていない。それに対して、ヨーロッパでは、義務教育以外の場で音楽教育が広く行われており、そこで多く子どもたちがピアノに関わる機会が保証されている。ハンガリーでは、学童期からピアノ教育の体系的なカリキュラムが整っており、その役割も専門家の養成に特化したものでなく、広く音楽愛好家の育成に資するという確固たる理念のもと行われている（降矢、2000）。イタリア（草野、1999）、フランス（小沢、2008）やドイツ（古賀、1994）でも、全国に音楽の公的機関が存在しており、地域におけるピアノ教育が広く行われている。

このように、ヨーロッパでは、国や市などによる公的な機関がピアノ教育において中心的役割を果たしているが、我が国において、ピアノ教師個人が運営しているピアノ教室の指導方針は、個々のピアノ教師に任されている。さらに、ピアノ教育の現場が基本的には教師—生徒のマンツーマン指導であり、その中で問題が生じた場合、他者から適切なアドバイスを得ること

は難しい。このようにピアノ教育の現場が、周囲から隔離された閉鎖環境であることは、問題を抱えたピアノ教師が解決策を見いだせぬまま孤立してしまったり、あるいは自らの指導の独善性を修正できず、生徒との関係を壊してしまうような危険性もはらんでいる。このような袋小路に陥らずに、ピアノ教師が教えがいを保ちつつ、指導に取り組むためには何が必要なのだろうか。

我が国においては、ピアノ教師の教えがいを取り扱った研究はほとんどないが、学校教育における教師の教えがいを扱った研究はいくつか見いだされる。藤田・油布・酒井・秋葉(1995)は、小中学校の教師の役割遂行に対する動機づけを日本とイギリスの制度の違いを踏まえて検討しており、イギリスにおいては、教師に任されたカリキュラム編成権が教師の職業人としての自信を高めるのに対して、日本では、カリキュラムの編成に関しては、国家の統制が強く教師の裁量が制約されているため、教師の職務への動機づけは、授業以外の活動の場で得られる生徒との(教科内容を越えた)個人的な人間関係によって高められると考察している。小島(2002)は、高校教師のやりがいや職業満足感についての意識調査の結果、教師のやりがい感は、基礎的な学力不足、授業への関心の低さ、自分勝手な態度、教師への反抗といった生徒の特性によって低下することを明らかにしている。これらの研究から、教師の教えがいは、教科内容そのものに対する生徒の学力や参加意欲に加えて、生徒と教師との個人的な人間関係によって高められる可能性が示唆されている。

目 的

本研究の目的は、我が国で広く行われている専門家の育成を目指していないピアノ教師に対する調査を通して、ピアノ教師が指導上抱えている困難と生徒への指導法が、ピアノ教師自身の教えがいとどのように関連しているのかを明らかにすることである。具体的には、以下の2つの仮説を検討する。

仮説1. ピアノ教師が“生徒一人ひとりにふさわしい指導を心掛けている”という生徒中心型の指導を行っているほど、ピアノ教師が指導上抱える困難が減少し、結果として“ピアノ教師の教えがい”が維持されるのではないかと。

仮説2. ピアノ教師が指導上困難を抱えていたとしても、ピアノ教師が“生徒一人ひとりにふさわしい指導を心掛けている”場合は、そうでない場合よりも、生徒との人間関係がよくなるため、“ピアノ教師の教え

がい”も維持されるのではないかと。

方 法

調査対象者

2007年7月1日から8月31日にかけて、郵送と直接の手渡しによって、専門家の育成を目指さず、自宅などでピアノを教えているピアノ教師167名に質問紙を配布し、無記名での回答と郵送での返信を依頼した。調査の結果、133票が回収されたが、欠損値のあった4票と他の世代に比較して極端に数が少なかった60歳代2票と70歳代1票は除外し、126票を本研究の分析対象とした(有効回収率75.4%)。

質問紙の構成

“ピアノ教師の教えがい”は、“ピアノ教師はとてもやりがいのある職業である”と“ピアノを教えることは楽しい”の2項目から構成されると仮定し、その合計得点を項目数で除した平均値を尺度得点とした。

“生徒中心型指導”は、“生徒一人ひとりにふさわしい指導を心掛けている”程度を1項目で測定した。“ピアノ指導の難しさ”については、“指導方法”、“教材の選び方”、“保護者との関わり方”、“生徒が練習しない”、“生徒が集中しない”という5項目について、ピアノ教師が困ったり悩んだりしている程度を質問した。上記すべての項目について、“強くそう思う”、“少しそう思う”、“どちらともいえない”、“あまりそう思わない”、“全くそう思わない”の5件法で測定し、順に5点から1点を配点した。

分析手続き

本研究で用いた変数の平均値と標準偏差をAppendix Iに示した。

尺度の検討 “ピアノ教師の教えがい”尺度(2項目)におけるクロンバックの α 係数は.690であり、ある程度の内部一貫性が示された。“ピアノ指導の難しさ”の5項目の因子構造を検討するために、固有値1を基準に主因子法により因子分析を行ったところ、因子がうまく収束しなかったため、主成分分析によって、再度因子の抽出を試みた。バリマックス回転を施したところ、2因子によってその分散の71.39%を説明できた(Table 1)。第1因子は“ピアノ教師の教材の選び方”、“ピアノ教師の指導方法”、および“ピアノ教師の保護者との関わり方”の3項目からなる“ピアノ教師の教授法の悩み”と命名し、第2因子は“生徒が集中しない”、“生徒が練習しない”の2項目からなる“生徒の学習意欲の低さ”と命名した。内部一貫性を示すクロンバックの α 係数を因子ごとに抽出したところ、

Table 1 “ピアノ指導の難しさ”各項目の因子負荷量 (N=126)

項目	I	II	共通性
ピアノ教師の教材の選び方	.871	.041	.760
ピアノ教師の指導方法	.869	.247	.816
ピアノ教師の保護者との関わり方	.561	.317	.416
生徒が集中しない	.176	.872	.791
生徒が練習しない	.109	.866	.787
固有値	2.540	1.030	
寄与率 (%)	37.909	33.476	
累積寄与率 (%)	37.909	71.385	

第1因子は.721, 第2因子は.756で十分な内部一貫性が示されたため, 因子ごとに, 項目の得点を加算し, 項目数で除した平均得点を因子得点として以下の分析に用いた (ピアノ教師の教授法の悩み: $M=3.20, SD=.96$; 生徒の学習意欲の低さ: $M=3.27, SD=.93$)

パス解析 仮説1を検討するために, “ピアノ教師の教えがい”を従属変数, “生徒中心型指導”を独立変数, “ピアノ教師の教授法の悩み”, “生徒の学習意欲の低さ”を媒介変数, “ピアノ教師の年齢”を統制変数としたモデルを構築し, パス解析によって検討した。

分散分析 仮説2を検討するために, “ピアノ教師の教えがい”を従属変数, “生徒中心型指導”, “生徒の学習意欲の低さ”を独立変数とする2要因の分散分析を行った。なお, 分析に先立ち, “生徒中心型指導”については5点を“強”, 1点~4点を“弱”という2群に分け, “生徒の学習意欲の低さ”については, 3点未満を“低”, 3点以上4点未満を“中”, 4点以上を“高”という3群に分けた。

結 果

ピアノ教師の特徴

ピアノ教師は, 女性が96.9% (男性3.1%)であり, 年齢は, 20歳代18.3%, 30歳代22.2%, 40歳代27.0%, 50歳代32.5%であった。専門教育を受けた教育機関は, 音楽大学86.3%, 教員養成大学4.6%, 一般大学5.3%, その他3.8%であり, そこでの主専攻は, ピアノ66.4%, 声楽9.2%, 音楽教育18.3%, その他5.3%, 無回答0.8%であった。

“ピアノ教師の教えがい”に対するパス解析

仮説1を検討するために, “ピアノ教師の教えがい”を従属変数, “生徒中心型指導”を独立変数, “教師の教授法の悩み”と“生徒の学習意欲の低さ”を媒介変数, “ピアノ教師の年齢”を統制変数としたモデルを構築し, パス解析によって検討した (Appendix II, Figure 1)。なお, 図では, 10%以上で有意な傾向がみられたパスのみを示している。その結果, “生徒中心型指導”は, ピアノ教師の教えがいに直接正の影響を及ぼす ($\beta=.307, p<.01$) と同時に, “生徒の学習意欲の低さ”を介して ($\beta=-.155, p<.10$), “ピアノ教師の教えがい”に影響を及ぼしていた ($\beta=-.200, p<.05$)。つまり, ピアノ教師の教えがいを高めるためには, 生徒中心の指導を行い生徒の学習意欲を高めることが重要である, ということが明らかになった。

また, “ピアノ教師の教授法の悩み”は, “ピアノ教師の教えがい”とは有意な関連がみられなかったが, “生徒中心型指導” ($\beta=-.229, p<.01$) と “ピアノ教師の年齢” ($\beta=-.273, p<.01$) からは負の影響を受けていた。つまり, ピアノ教師が生徒中心型の指導を行っており, 年齢を経て経験を積んでいるほど, ピアノ教師の抱え

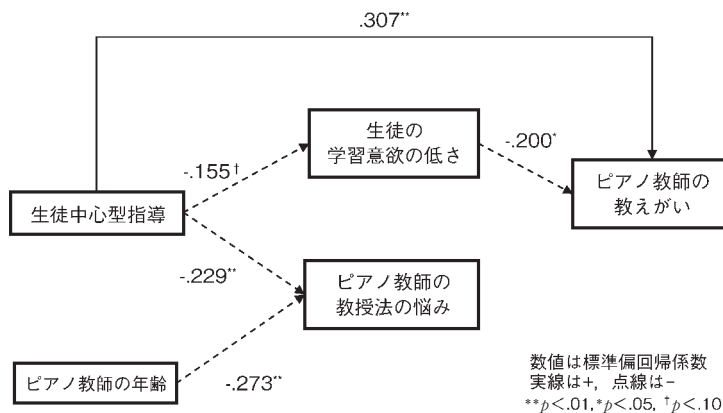


Figure 1 “ピアノ教師の教えがい”に対するパス解析 (N=126)

る教授法の悩みは少なくなっていることが明らかとなった。

“生徒の学習意欲の低さ”が“ピアノ教師の教えがい”に及ぼす影響に対する“生徒中心型指導”の緩衝効果

“ピアノ教師の教えがい”を従属変数，“生徒中心型指導（強・弱）”，“生徒の学習意欲の低さ（弱・中・強）”を独立変数とした2要因の分散分析を行った結果（各群における平均値と標準偏差はAppendix IIIに示した），主効果に関しては“生徒中心型指導”に5%水準で有意な効果（ $F(1, 120)=5.23, p<.05$ ）がみられ，“生徒の学習意欲の低さ”には10%水準での有意な傾向（ $F(2, 120)=2.75, p<.10$ ）がみられた。さらに，“生徒の学習意欲の低さ”と“生徒中心型指導”の交互作用にも有意な傾向がみられた（ $F(2, 120)=3.03, p<.10$ ）ため，交互作用の内容を明示するためにFigure 2を示した。Figure 2より，生徒中心型の指導を充分行っていない場合は，生徒の学習意欲が低いとピアノ教師の教えがいは低下するが，生徒中心型の指導を充分行っている場合には，生徒の学習意欲が低くても，ピアノ教師の教えがいは低下せず，維持されていることが明らかとなった。

考 察

ピアノ教師が指導上抱えている困難と生徒への指導法が，ピアノ教師の教えがいとどのように関連しているのかをパス解析と分散分析を通して検討した。

パス解析の結果，ピアノ教師の教えがいは，生徒のピアノ学習意欲が高いほど高くなり，生徒のピアノ学習意欲を高めるためには，“生徒一人ひとりにふさわしい指導を心掛ける”という生徒中心型の指導を行うことが重要である，ということが明らかになり，仮説1は支持されたといえるだろう。ピアノ教師の教授上の

悩みに関しては，ピアノ教師の教えがいに影響を及ぼしておらず，教授法や保護者との関係に多少の困難があっても，そのこと自体が，ピアノ教師の教えがいを低下させるものではないことが明らかになった。また，そのような問題は，年齢を重ね経験を積むとともに低下することも示された。

分散分析の結果，生徒のピアノ学習意欲が低くても，生徒中心型の指導を行うことにより，ピアノ教師の教えがいは低下しないことが明らかとなり，仮説2は支持されたといえるだろう。

これらのことから，ピアノ教師が教えがいをもって指導に取り組むためには，生徒一人ひとりの資質や能力に応じた指導の重要性が示唆されたといえる。ピアノ教師が生徒との良好な信頼関係を築き，生徒中心型の指導を丁寧に行うことによって，生徒の学習意欲も高まり，ピアノ教師の教えがいにもつながっていく。このような好循環によって，ピアノ教育が生徒にとっても，教師にとっても，単なる演奏技能の習得を超えた価値を提供できるものになっていくことが期待されるだろう。

ピアノ教育は，基本的にマンツーマンの個別指導で行われるため，一人ひとりに向き合う生徒中心型指導の実施は容易なように考えられがちである。しかし，生徒一人ひとりの能力や適性に注意を払い，興味に寄り添い，練習環境も考慮した上で，その生徒に見合った適切な教本の選択を行う必要があることなど，課題は多い。また，指導が周囲から隔離された閉鎖環境で行われることから，教師と生徒との関係が悪化してしまった場合，周囲からのアドバイスやサポートが受けにくいというような負の側面も持つ。

音楽教育が，Mursell(1934)が述べていたように，単

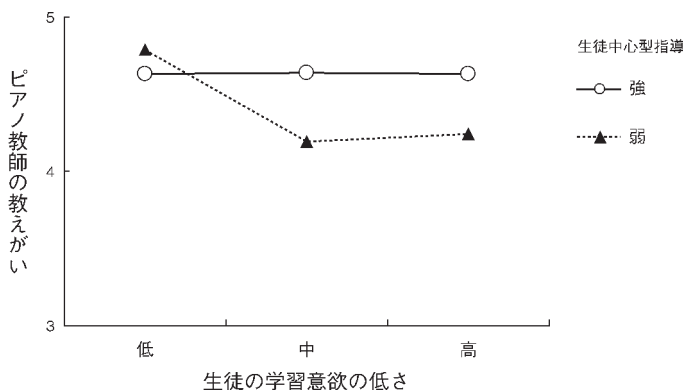


Figure 2 “生徒の学習意欲の低さ”が“ピアノ教師の教えがい”に及ぼす影響に対する“生徒中心型指導”の緩衝効果（ $N=126$ ）

なる演奏技能の習得ではなく、音楽という活動を介して、教師と生徒の人間的なふれあいから、互いの人間的な成長を目指すものであるとするならば、現在、多くのピアノ教室の現場で起きているこのような問題への対策を、個々のピアノ教師に任せきりにするのではなく、音楽大学やピアノ教師が所属する団体が真剣に検討していくべきではないだろうか。

引用文献

- Cavaye, R.・西山志風 (1987). 日本人の音楽教育 新潮選書
- 藤田英典・油布佐和子・酒井 朗・秋葉昌樹 (1995). 教師の仕事と教師文化に関するエスノグラフィ的研究—その研究枠組みと若干の実証的考察— 東京大学大学院教育学研究科, **35**, 29-66.
- 降矢美彌子 (2000). 日本のピアノ教育の現状と未来：ハンガリーのピアノカリキュラムの分析からの考察 宮城教育大学紀要, **35**, 101-140.
- 古賀雅子 (1994). ドイツと日本のピアノ教育：実践的経験をもとに 佐賀大学教育学部音楽家研究論集, **1**, 19-35.
- 小島秀雄 (2002). 教師の意識全国調査の分析 (15) 高校教師のやりがい感・満足感 教職研修, **31**, 3, 90-93.
- 草野明子 (1999). イタリアのピアノ教育事情：その現状とわが国の比較 国立音楽大学研究紀要, **34**, 133-146.
- Mursell, J. L. (1934). *Human values in music education*. New York : Silver, Burdett and Company. (マーセル J. L. (著), 美田節子(訳) (1967). 音楽教育と人間形成 音楽之友社)
- 日本ピアノ教育連盟 (2011). 組織 2011年7月8日 <http://www.jppta.jp/jpta/organization.html> (2011年11月24日)
- 小沢麻由子 (2008). フランスにおけるピアノ教育への考察 尚美学園大学芸術情報研究, **14**, 23-31.
- 全日本ピアノ指導者協会 (2011). ピティナ協会概要 2011年9月27日 <http://www.piano.or.jp/info/about/organization> (2011年11月24日)

Appendix I 分析に用いた変数の平均値と標準偏差 (N=126)

	M	SD
ピアノ教師の教えがい		
ピアノ教師はとてもやりがいのある職業である	4.52	.59
ピアノを教えることは楽しい	4.52	.62
ピアノ教師の教えがい尺度	4.52	.53
生徒中心型指導		
生徒一人ひとりに相応しい指導を心がけている	4.64	.50
ピアノ指導の難しさ		
生徒が練習しない	3.44	1.10
生徒が集中しない	3.10	1.12
教材の選び方	3.48	1.23
保護者との関わり方	2.66	1.15
指導方法	3.47	1.20
ピアノ教師の年齢 ^{a)}	2.74	1.10

a) 20歳代=1, 30歳代=2, 40歳代=3, 50歳代=4

Appendix II “生徒の学習意欲の低さ”、“ピアノ教師の教授法の悩み”、“ピアノ教師の教えがい”を従属変数とした重回帰分析 (N=126)

独立変数	従属変数					
	生徒の 学習意欲の低さ		ピアノ教師の 教授法の悩み		ピアノ教師の 教えがい	
	β	r	β	r	β	r
ピアノ教師の年齢 ^{a)}	-.062	-.073	-.273**	-.289**	-.110	-.115
生徒中心型指導 ^{b)}	.155 [†]	-.159 [†]	-.229**	-.248**	.307**	.297**
ピアノ教師の教授法の悩み	—	—	—	—	.140	.110
生徒の学習意欲の低さ	—	—	—	—	-.200*	-.182*
	.171		.368**		.377**	
	.029		.136		.142	

a) 20歳代=1, 30歳代=2, 40歳代=3, 50歳代=4

b) 1~4点=0, 5点=1

** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

Appendix III “生徒の学習意欲の低さ”と“生徒中心型指導”が“ピアノ教師の教えがい”に及ぼす影響 (N=126)

		生徒の学習意欲の低さ								
		弱			中			強		
		n	M	SD	n	M	SD	n	M	SD
生徒中心型指導	強	24	4.63	.54	28	4.64	.41	30	4.63	.57
	弱	7	4.79	.39	18	4.19	.49	19	4.24	.48